

一月の冷たい風が、河川敷の枯れ芝の上を吹き渡っていく。

ひとりの子どもが、寒風に正対するようにしてゲイラカイトを掲げた。風はバタバタとビニールをはためかせ、風を抱えた。

風糸を握ったもう一人の子どもが風上へと走りだす。ゲイラカイトは急角度で飛び立ち、低く垂れ込めた冬の雲に向かって一直線で向かっていく。歓声が上がった。河川敷を走る子どもたちの視線は風だけを向いているが、少し堤防より立つ大人たちは子どもたちの足元を慈しみ深く見つめている。その大人たちの中に、長身のウマ娘の姿があった。アドマイヤグルーヴ。かつてトウインクルシリーズで輝かしい成績を残したウマ娘。彼女は今、目の詰まったダツフルコートを羽織り、河川敷で戯れる子どもたちを見守っている。

風が強く吹いた。ぶん、と糸が鳴る音がして風は吹き飛ばされた。あっ、と声を上げて風糸を握っていた子どもが尻餅をついた。駆け寄ろうとしたアドマイヤグルーヴは、すぐに歩調を緩めた。年長の子供が、転んだ子にすぐ近寄り、抱き起こしたからだ。いっぽう、糸が切れた風は空中で二転三転して、逆さまに川へと落ちていった。あーっ、という子どもたちの悲鳴、そして大きな泣き声が河川敷に響く。

「大丈夫？どこか痛いところはない？」

アドマイヤグルーヴは歩み寄り、転んだ子に声をかけた。返ってきたのはしゃくりあげる声だけだ。アドマイヤグルーヴは子どもの全身を見る。顔は涙に歪んでいるし、上着には枯れた

芝が付いているが、立ち姿に違和感はない。涙の原因は怪我や痛みによるものではないだろう。アルヴお姉さん、みんなの風が、ごめんなさい、泣き声に混じってそんな言葉が聞き取れた。「怪我がなくてよかった。私たちはそれで十分だから」

アドマイヤグルーヴの言葉を皮切りに、他の子どもたちも口々に慰めの声を掛ける。転んだ子が泣き止むのを見てアドマイヤグルーヴは子どもたちの輪を離れた。

グーッ、とくぐもった音が鳴った。コートの中でスマートフォンの震えていた。アドマイヤグルーヴは傍らに立つ女性に視線を送った。視線が返ってきたのを確かめて、アドマイヤグルーヴはスマートフォンを取り出した。画面に浮かんた「事務所」という文字列を一瞥し、彼女は通話のボタンをタップした。「はいアルヴです」

『ああ、代表、すみません。外出中に』

スピーカーフォンから返ってきたのは、困惑気味の若い男性スタツフの声だった。

「構わないわ。ありがとう。要件は何」

『ええと、K市の児相の方からお電話ありました』

「K市!?……いいわ、繋いで」

端的に指示を出してアルヴは堤防に向かって斜面を歩いていく。スピーカーの向こうでは使い慣れぬ転送機能と格闘するスタツフの声が聞こえてきた。

アルヴは今、複数の児童養護施設の運営に携わっている。NPO法人代表、つまるところ連絡・広報・雑用その他全部が守備範囲の彼女にとって、児童相談所から電話がかかってくるのは珍しいことではない。だが、K市。スタツフの告げた言葉が引つかかる。K市は九州K県の県庁所在地だ。アルヴのNPO

が籍を置く東京都F市からは遠く離れている。都や近隣の県の児相ならともかく、なぜK市から……

ぶつ、と疑念を中断する音がして回線がつながった。

「おまたせして申し訳ございません。NPO法人マーガレットガーデンのアドマイヤグルーヴです」

電話アプリの画面に向かい、アルヴは名乗った。

『突然のお電話申し訳ございません。K市児童相談所、児童福祉司の田村と申します』

返ってきたのは、張りのある男性の声だった。

「いえ、お電話ありがとうございます。こういったご要件でしょうか」

『こちらが保護した乳児について、そちらにご相談したいことがあります』

アルヴは目をしばたかせた。眉間に皺が寄り、切りそろえられた尾が左右に振れる。すみません、唐突ですよね、と電話口で田村は詫びた。

『今朝、“ゆりかご”への預け入れが発生しました』

“ゆりかご”。その言葉を聞いてアルヴのメンコに包まれた長い耳が立った。“ゆりかご”は乳児を匿名で保護する仕組みで、設置当初は「赤ちゃんポスト」とも呼ばれていた。病院の外壁に大きな金庫ほどの扉がついており、その扉は適温に保たれたスペースにつながっている。何らかの事情で赤ん坊を育てられなくなった親は扉を開け、赤ん坊をスペースに置き、扉を閉じる。するとアラームが鳴って病院スタッフが建物内から赤ん坊を保護する……という仕組みだ。アルヴも児童福祉に関わる者として、“ゆりかご”の概要と、それが設置当初に巻き起こした議論の大きさは知っていた。「百点の仕組みでなくても子

どもの生命保護のためには必要だ」「そうした仕組みがあることで子を棄てることを助長しかねない」など様々な意見が噴出し、大手新聞が取り上げたこともあり議論は全国に広がった。その創設から十余年余が経過したが、その法的な立ち位置の不透明さゆえに“ゆりかご”はそれを最初に設置したK市のY病院以外には設置されていない。

田村は続けた。

『“ゆりかご”に預けられたのはウマ娘の赤ちゃんです。その子の持ち物に保護者からの手紙があり、その子をそちらに……マーガレットガーデンさんに預けてほしいと書いてあったのです』

「うちですか？」

疑問がアルヴの口をついてでた。スピーカーの向こうから、他の誰かが電話の受け答えをしている音が聞こえる。田村はアルヴが言葉を続けるのを待っているようだった。

「うちは確かに、児童養護施設を運営しています。けれど、どこもK市とはかなり離れているように思います」

『ステイルインラブという名前に心当たりはありませんか？』

アルヴは息を呑んだ。沈黙の中で通話時間を示すタイマーだけが数字を増やしていく。河川敷を踏みしめた両足を寒気が上ってきた。ステイルインラブ。アルヴがその名を他人の口から聞いたのはもう何年も前のことだ。あるはずのないターフの感触。アルヴは反射的に枯れ草から足をどけ、コンクリ敷きの階段を一段登った。

「それは……古馴染みです。古馴染みの……友人、です」

絞り出したようなアルヴの答えにスピーカーの向こうで田村が息を吐く音が聞こえた。そこにわずかながら安堵の色があっ

たようにアルヴには聞こえた。

『そうだったのですね。そのステイルインラブさんと連絡を取ることはできますか？残されていた手紙に署名があったのです。もしそちらが連絡先をご存知でしたら……』

「お力になれず申し訳ございません」

私にも彼女が今どこにいるかはわからないのです、とアルヴは続けた。そしてステイルインラブというウマ娘が姿を消して五年になること、家族やトレンセン学園の関係者が捜索願を出したが未だ見つからないことを電話口に告げた。

『……ありがとうございます。保護者についての事情はわかりました。そうなつてきますと話は変わりますが、保護者の言葉の通り、赤ちゃんをそちらで受け入れていただくことは考えてもらえませんか』

納得はしてくれたようだが、田村の言葉はさすがようだった。核家族化による機能不全家庭の増加、児童相談所の介入を求める市民の声、増える権限とともに多様化多角化する業務、限られた地方自治体の予算……。どこも児童福祉の形は似通っている。慢性的なリソース不足を職員の使命感と熱意で補っている。

いえ、うちは、乳児は預かっていなくて、アルヴはそう答えるつもりだった。ステイルインラブ。赤い目をしたウマ娘。アルヴの言葉がわずかに遅れ、先に田村が言葉を発した。

『マーガレットガーデンさんで、乳児保育の実績がまだないことは存じております。けれども、この赤ちゃんのことを考えると、やはり最終的にそちらに預かってもらうのが一番良いと思えるのです』

どういうことでしょうか。アルヴは乾いて粘りつく口でそう

答えるのが精一杯だった。電話口の田村という人物は、熱意をもって丁寧に仕事をしている。口ぶりからするとおそらく、F市の児童相談所とも連携しているのだろう。そうした人物が保育実績のない施設に大切な赤ん坊を預けようとするなどあるだろうか？

『ゆりかご』に預けられ、親が名乗り出なかった子どもは、過去を持ちません。身元不明の棄児として戸籍が作られ、市長によつて名前が与えられます。もちろんその後は私たちが責任を持つて乳児院や里親につなぎます。けれど子どもはいずれ成長し、思春期を迎え……自らのルーツを辿ろうとする日が来ます。そうなったときにせめて、母親を知るアドマイヤグルーヴさんが近くにいれば、どれだけその子にとつて救いになるでしょうか』

浮かされたように、田村は一息に言い切った。

ざあ、と音がして枯れ草が乾つ風にかき揺れる。少し離れたところで子どもたちの面倒を見ていたスタッフが、長電話を続けるアルヴのほうをちらりと見た。

「おっしゃることの意味は、とても、よくわかります。私も似たようなものでしたから」

アルヴは付け加えた。電話の向こうで田村が息を呑む音が聞こえた。

『それは……失礼しました』

「いいえ。お気になさらず。いったん、そちらの事情はわかりました。明後日に九州に行く用事がありますので、その際に改めてお話をさせていただけないでしょうか」

ごめん、もう少し。アルヴは片目をつむり、スタッフに右手で拝むような謝罪のジェスチャーを送った。そしてアルヴは続

けた。

「うちはまだ乳児を預かるだけの用意がありません。けれどお話を伺って、その子のために準備を整えたほうが良いかもしれないと感じました。そのためにも一度その子に会わせてもらえないでしょうか」

* * *

純白に塗られた翼が冬の陽光を反射して輝く。九州へと向かう国内線のエコノミークラス、小さな窓からは雲海が見えるのみだ。シートベルトの警告灯が消えてからしばらく経つ。平日なのもあって、機内には出張サラリーマン風の乗客が大半だった。アルヴは前のシートの背もたれから、少しくたびれ始めた機内誌を引き抜いた。パラパラと広告だらけのページをめくり、アルヴは手を止めた。「世界を変える三十人の若者」そう銘打たれた特集記事。紙面に大きく写っているのはパンツスーツをまとい、硬い表情で佇む自分自身。「アスリートからNPO代表へ——マーガレットガーデン代表アドマイヤグルーヴ」載ったんだ、とアルヴは呟いた。インタビュを受けたのは半年以上も前のことだ。原稿のチェックこそしていたが、こうして実際に印刷されたものを目にするとは面映かった。

トゥインクルシリーズを走りきって、アルヴの手元には財産が残された。トレセン学園はアスリートの学校であると同時に、お嬢様学校でもある。その中で親のいない、施設育ちのアルヴは異色だった。家族によるサポートが期待できない身である以上、アルヴは積極的にスポンサーされた仕事を受けたり、学園側もそれを必要なこととして認め、契約などの支援を行っ

た。いずれシリーズを引退してセカンドキャリア——多くの者は大学へ進学する——に進むとき、彼女は学費や生活費を自分で払う必要があったからだ。

結果として、「神童」アドマイヤグルーヴは普通の人間が何十年もかけて稼ぐような金額を己の脚で稼ぎ出した。だが、走り終わってみれば、アルヴはその富を自分のために使う気にはなれなかった。自分はまわりのウマ娘のように親から何もかもを与えられたわけじゃない。群れの中でただ一人、私だけが自分の脚で運命を切り開いてきた。そんなふうに自負していた時期もあった。けれど、アルヴは実のところ多くのものを受け取ってきたのだ。彼女にそれを与えたのが血のつながった親ではなかったと言うだけで。

縁あって施設運営に関わるようになってアルヴは知った。児童福祉の業界は薄給で、人も足りていない。補助金と気まぐれな寄付、そしてほぼ信仰と言っているような熱意に支えられて回っていた。そうした環境の中でもアルヴはトレセン学園に入るほどのレース教育を受けることができたのだ。もちろん世評通り才能があつたから許されたことだろう。だが、巷のジュニア向けレース教室の月謝を考えれば、一体どれほどの無償の善意がトレセン学園に入るまでのアルヴに対して捧げられてきたことか。それを考えると、アルヴは気が遠くなる。

「自分が受け取ってきたものを返していきたい」機内誌のインタビュはそう締めくくられていた。受け取ったものを返す。アルヴは最後の一文を読み返した。そのために今自分はここにいる。彼女を応援するファン——今は後援者といったほうがいいだろう——は日本のあちこちに。そこからの寄付はアルヴのNPO、マーガレットガーデンにとって最大の資金源とな

っている。生ける広告塔であるアルヴは文字通り日本中を駆け回って、子どもたちへの寄付を集めているのだ。

アルヴは長く息をついて機内誌を閉じ、カップホルダーに手を伸ばした。小さな紙コップに入ったコーヒースは冷めていて、口に含むと強い苦みがあった。鼻へと抜けていく深煎り豆の香りが記憶を呼び起こした。カフェテリアの隅でコーヒースを前に、控えめな……それでいて幸せそうな笑みを浮かべトレーナーと談笑する、小柄なウマ娘。ステイルインラブ。史上二人目のトリブルティアラ。アルヴが記憶する限り、学園内での生徒としてのステイルインラブの振る舞いは「引つ込み思案」「消極的」「目立たない」といった言葉に尽きる。だが、ステイルインラブはレースとなると、全く違った側面を見せた。

赤いドレスを翻し、哄笑しながらターフを駆ける捕食者。それがレースの時のステイルインラブだ。レースの前半こそ静かに、バ群に埋もれるようにして息を潜めているが、仕掛けどころと見るや別人のように、歓喜の笑い声をあげて一気に差し切る。喰らい尽くすという表現がふさわしい走り。現役時代、アルヴはステイルインラブを後ろから見るようなポジションでレースを進めることが多かったが、ステイルインラブに追い抜かれ垂れてくるウマ娘たちの顔には一様に同じ表情が浮かんでいた。恐怖。それが、アルヴの知るアスリートとしてのステイルインラブだった。

トリブルティアラという競技者の頂点を極めたウマ娘であったにもかかわらず、五年前、ステイルインラブは失踪同然にしてトレセン学園を退学した。消えた当初は騒然として学園全体が浮足立っていたが、一週間もすると日常が彼女たちの痕跡を埋めはじめた。ステイルインラブが日々換えていた花瓶の水

は、美化委員のウマ娘が換えるようになった。彼女がトレーナーと仲睦まじく座っていたカフェテリア隅の席は、いつの間にか騒がしいウマ娘たちの定位置となっていた。ステイルインラブのことを周囲に聞いても、「影が薄い子だったよね」「なんかあんまり記憶に残らないっていうか」というような言葉ばかりが返ってくる。ともにティアラ戦線を行ってきたウマ娘たちでさえそうなのだ。アルヴには何よりそれが信じがたかった。あの刻みつけられた恐怖はそんなふうに消えてしまうものなのか、と。

アルヴは空になった紙コップをカップホルダーに戻し、窓の外を眺めた。ステイルインラブが再び現れた。彼女の子とともに。誰との、というところについてはアルヴには確信に近い心当たりがあった。

* * *

Y病院はK市の周産期医療の一翼を担う大きな病院であり、K市の中心部から少し離れたところに位置する。教会風の建築と掲げられた十字架はその運営母体に由来するもので、この病院のモットーでもある「慈悲」の象徴であった。高い生け垣によって歩道から目隠しされたアプローチの一角に、全国で唯一の「ゆりかご」が設置されている。

「可愛い赤ちゃんでしょう」

穏やかな声で年かさの看護師がそう言った。アルヴは目を伏せ、無言で頷いた。ガラス張りのベビールームに並べられたベビーベッド。その中で栗毛の小さなウマ娘が穏やかに眠っていた。生まれたての新生児ばかりのベビールームにあって、その

仔ウマ娘は周囲の赤ん坊よりふた周りほど大きい。ウマ娘は大きく生まれるというのがあるが、生まれてある程度の時間を過ごしたあとに「ゆりかご」へと預け入れられたものだと思われる。

「本当にお母さんの居場所、わからないんですかね」

看護師の言葉に、お力になれず申し訳ございません。とアルヴは答えた。

「この子、ゆりかご」に入れられたときにね、おくるみに入っててね、顔も目やにもなく綺麗にされてましたよ。自分で育てられなくて子を棄てる母親もいますけどね、この子はきちんと世話されてた子ですよ。だからあたしは悔しいんですよ。事情さえわかれば、なんとかできたかもしれないですから」

アルヴは洗面のまま頷き、再びベビールームを覗き込んだ。眠っていた仔ウマ娘の耳が小さく震えた。仔ウマ娘はガラス越しの大人たちに気づいたのかニツコリと微笑み、目を開けた。吸い込まれるような赤い瞳。唐突な悪心にアルヴはブラウスの胸元を握りしめた。

「ご友人の面影はありますかね」

左後ろに立った背広の男——田村——がそうアルヴに声をかけた。

「おそらく、いえ、間違いなく」

アルヴの声は詰まっていた。そうですか、と田村が答える。

「この子を育てていただくことは、やはり難しいでしょうか」

「お電話をいただいてからずっと、考えています。ですが、私たちは他の子どもたちのケアもしています。それをおろそかにすることはできません」

アルヴの言葉は衷心からのものだった。乳児の保育には保育

士資格を持ったスタッフが必要だ。アルヴが代表を務めるNPOにも有給のスタッフとして何人か保育士はいるが、それぞれ異なる拠点で働いもらっている。乳児の保育——二十四時間体制での保育——となると、その保育士たちを一箇所に集めて、交代で勤務させることになる。

「すみません、もう少しだけ。もう少しだけ考えさせていただけませんか」

ステイルインラブの子とされる赤ん坊……その子に縁を感じて引き取りたいと思う気持ちがあるとすれば、それはアルヴの個人的な感傷に過ぎない。そしてそれが本当にアルヴ個人の感傷に尽きているならば、彼女は悩むことなく断つただろう。だが、乳児の保育ができるようになれば、アルヴたちはまた違った形で貢献ができるようになり、今まで救いの手を差し伸べることが難しかった子どもたちにも関わるようになるようになるかもしれない。

「今週、いえ明後日までに必ずお返事をいたします」

アルヴは頭を下げた。いや、頭をあげてください、お願いしてるのはうちですから、と慌てて田村が頭を下げた。

「お返事はいつでも構いません。しぶ……緊急用の番号をお伝えしておきますから」

私物、と言いかけたのを繕い、田村はメモを差し出した。

* * *

「ええ、シンボジウム^{シンボジウム}ではありますがとうございました。懇親会でもっとお話ししたかったのですが最後までお話できず本当に申し訳ないです。ええ、ええ、はい。こちらこそまたお話できれば

と思います。夜分失礼いたしました」

電話を切り、アルヴは息をついた。温暖なK市と比べると関東は寒く、アルヴがついた息はたちまちに白く曇った。引っかかりのある機械音を立ててマンシヨンの自動ドアが開く。年季の入った薄暗いエントランス。小ぶりのキャリケースの車輪がタイルの目地に弾かれ、ガタガタと音を立てた。

昨晩はY病院へ寄った後に支援者と会食、今日は午前から博多に移動してシンポジウムでの講演を行い、懇親会に顔を出しそのまま空港へ……アルヴの九州出張は目まぐるしいものだった。もちろんそうした用事は氷山の一角で、その前とその後に来るの仕事が待っている。

コートのポケットにスマートフォンを落とし、アルヴは郵便受けに手を伸ばした。アルヴの自宅は事務所も兼ねている。郵便物のチェックはスタッフがやっているが、アルヴはエントランスに入ると真っ先に郵便受けに向かう癖が付いていた。

番号を合わせて薄いアルミ製の扉を開けると、封筒がひとつ、郵便受けの奥に届いていた。アルヴの眉間に皺が寄る。スタッフを取りそこねたのだろう。仕事柄、封書でのやり取りはまだ多かった。

「ちよつとこれ……ちゃんとチェックして、つて言ってるのに」

口をとがらせ、アルヴは郵便受けの中に手を入れた。後から入れられた郵便物に押しつけられたのだろう。封筒は壁に押し付けられるようにして郵便受けの奥底に嵌まり込んでおり、アルヴは爪を引っ掛けて封筒を取らねばならなかった。手入れされた爪に欠けがないことを確認してから、アルヴは封筒を改めた。厚みのある茶封筒に書かれた小さな「アドマイヤグルーヴ様」の宛名。消印はK市内の郵便局のものであった。K市。どく

ん、と心臓が跳ねた。アルヴは急いで封筒を裏返す。寒々とした蛍光灯の中で差出人の名が浮かび上がった。

ステイルインラブ。

アルヴは封筒を握ったまま足早にエレベーターへと向かった。

スタッフはすでに帰り、オフィス——本来ならリビングと呼ばれていただろう部屋だ——の電気は消え、冷え切っていた。

コートもそのままにアルヴは自分の席に向かい、デスクライトの下で手紙の封を切った。茶封筒には幾枚もの便箋が重ねられては三つに折りたたまれ、押し込められていた。

「前略ごめんください。唐突なお手紙を差し上げますことお許しください。」

手紙には時候の挨拶はなく、詫びの言葉が続いていた。アルヴはオフィスチェアに腰掛け、食い入るようにして読み進めた。「頼ることができる方もおらず、どうしようもなくなり筆を手に取りました。大変申し訳ないのですが、ひとつお願いを聞いていただけないでしょうか。大変難しいお願いです。

というのも、一人のウマ娘を預かっていただきたいのです。縮れた栗毛の可愛い小さなウマ娘です。私の、そしてあの人のたった一人の娘です。その子の名前は……ここに書くことはできません。書けばそれは私からの呪いになってしまうでしょうか。

その子を預ける理由について、どこから話せばよいのでしょうか。トレセン学園を去って五年、とてもたくさんの方がいました。今も心の中が整理できておらず、正しくお伝えできるかはわかりません。乱文乱筆をご容赦ください。

覚えておいででしょうか。五年前の冬、私は逃げるようにし

てトレセン学園を去りました。走り続けることが難しかったのもあるのですが、これ以上あそこにいると、彼を……大切な人を傷つけてしまうとわかったからです。

ひとり暮らしを始めて、しばらくは足を一本失ったような毎日でした。食事の用意をするたび、図書館で本を借りるたび、あの人がいないことを思い知らされました。そのたびごとに、これでいいんだ、こうするしかなかった、そう自分に言い聞かせるようにして生きていました。あまり気づいてもらえなくって学園では苦勞をしたこともありましたが、隠れるようにして暮らすには好都合でした。誰にも覚えられず、生きていけばいい、そうしてあの人が私を忘れてしまうまで……そんなふうに毎日考えていました。変ですよ。本当に忘れてほしいなら、会いたくないのなら、生きている必要なんかないのに。

私が住んでいた街——K市という南の街です——から少し離れたところに大きな花畑のある公園がありました。心が荒れたとき、苦しくなったとき、私は決まってそこへ走って行きました。山肌にあるから空が広くて……寂しさも、未練も、辛さも……何もかも空に溶けていくように思えたんです。

ある初夏の蒸し暑い晩のことです、私はその花畑で満月を眺めていました。街灯なんてない、都市部から離れた場所です。一面に植えられたマリーゴールドの橙と黄の彩りは、青白い月明かりの下ですべて灰色に見えました。

ステイル、そう呼ぶ声が聞こえました。私は声がした方へ振り返りました。私は色鮮やかな花の絨毯を見て、息を吞みました。何度も忘れようと思って忘れられなかった人が——私のトレーナーが——花畑の中に立っていました。

近寄らないで。私は彼に言いました。私はあなたを壊してし

まうから。私は精一杯の強さでそう言ったつもりでした。けれどきつと、それは弱々しい声に聞こえたと思います。

彼は私の制止も聞かず、マリーゴールドの海を泳ぐようにして歩み寄ってきました。彼は言いました。ずっと探していたんだと。自分の心に聞いて何もかも覚悟を決めてきたと。

まだ愛している、と。

その言葉で私たちは決めました。最後まで行こうと決めたんです。たとえ壊れてしまっても最期まで一緒にいましょう、死が二人を分かつまで……いいえ、その先だってずっと。そうあの花畑で私たちは誓いました。その晩から、私たちは一緒に暮らし始めました。失った時間を埋めようとするみたいに、私たちは幸せな恋人たちがすることならなんだってしました。

それからの数カ月間は本当に幸せでした。この時間が永遠に続けばいいのに。そんな睦言を互いに囁きあいながら満足して眠りにつく。そんな毎日でした。

けれど、やはり運命は私たちを見逃してはくれませんでした。プールに出かけた日の夜のことで、私は彼の背中が火傷を負ったように焼けただれていることに気づきました。泣きじやくる私を抱きしめながら「ただの日焼けだよ」と彼は言いました。その日を境に、ゆつくりとではありましたが彼の衰弱が始まりました。学園にいた頃のように、です。日を追うごとに彼の目は赤くなつてゆき、食べ物も私が作ったもの以外は受け付けないようになり……生活のためにしていた仕事もやめざるを得なくなりました。

私たちに残された時間は長くありませんでした。あなたといた証がほしい。私は彼にそう告げました。そして、私は彼の子を身ごもりました。

季節が巡って私のお腹が大きくなっていく間、彼は衰弱し続けた。私が臨月を迎える頃には夜さえ起きられなくなつて、蛍光灯の明かりですら痛むようで……私たちは遮光カーテンで囲まれた部屋の中、頼りないオレンジ色の常夜灯だけで暮らしていました。

私は病院へは行きませんでした。彼はもう外出できる身体ではありませんでした。私が病院で子を産めば、私も子も彼のそばにはいられなくなるでしょう。だから、私は自分の子をアパートの狭いバスルームで産みました。へその緒をキッチンバサミで切つてトイレに流して、初乳をあげて……とても痛かつたけれど、一刻も早く彼にこの子の手を握らせてあげたいと考えると、痛みは気になりませんでした。私は間に合いました。

間に合つたんです。本当にぎりぎりだつたけれど、私は彼に我が子の手を握らせることができました。おじいさんの手みたくいになつてしまつた彼の指が、しわくちゃの赤ちゃんの手を撫でたんです。彼が言つた言葉は微かで、吐息が耳の毛を揺らすくらいでよく聞き取れなかつたけれど……頑張つたね、と言つてくれたことだけはわかりました。

程なくして彼は眠るようにして旅立ちました。穏やかな死に顔でした。

それから三ヶ月と少し、私は少しずつ灰へと変わつていく彼の隣でこの子の世話をしました。泣けばあやしてあげて、お乳を飲ませてあげて、おむつを替えてあげて……眠る間もなく、薄暗い部屋の中で半分まどろみながら半分起きているような毎日が続きました。

ある日、この子の顔を覗き込んだことです。この子は笑つて、それから目を開けました。綺麗な赤い瞳でした。それ

は私が生涯で最も長い時間見つめた瞳の色でした。涙がこぼれて……それからどれくらいかわからないくらい私は泣き続けた。きつと私の心はその時になつて初めて、彼がいなくなつてしまつたことに気付いたんだと思います。

この子はこれから、どんどん大きくなっていくでしょう。そして、どんどん彼に似ていくでしょう。そうなったとき、私は正気でないでいるでしょうか。この子の真つ赤な瞳を覗き込むたび、癖のついた栗毛の髪をくしけずるたび、私は逝つてしまつた彼のことを思い出すに違いありません。私はそれに耐えられず、きつといつの日かこう口にするでしょう。

「あの人がもういないのに、どうしてあなたがここにいるの」
つて。

私は、この子のことを愛していたのでしょうか？それとも、この子の向こうにいるあの人を愛していたのでしょうか？答えはおのずから明らかでした。私は彼のことを……まだ愛しているのです。

それが全部です。あの時、トレセン学園を去つたときと同じです。この子のことを傷つけてしまふ前に、私は遠くへ、愛する彼のもとへとゆくつもりです。

アルヴさん。ご無理を言つてしまい申し訳ございません。後生です。この子が自分の脚で生きていけるようになるまで、どうか面倒を見てあげてはもらえないでしょうか。

先日、アルヴさんの姿をウマチューブで見ました。あなたは施設の子どもたちと笑いあつていて、すぐ眩しかった。私はあなたのように笑うことはできません。この子をお願いできるとすれば、愛することを知っているあなたしかいない。その時にそう思つたのです。

ついぞ子を受せず「母親」になり損ねたウマ娘の繰り言です。この子を誰よりも幸せにしてほしいなんて言えませんが、あなたや私のように走れる子に育ててほしいとも言えませんが、ただ、どうか、この子にどうか、あなたのお世話している他の子たちと同じだけの愛情を注いであげてはもらえないでしょうか。自分の子さえ愛することのできない私に育てられるよりも、そのほうがきっとこの子にとって幸せになるのだと思います。

ご挨拶もできず、ただわがままなお願ひばかりとなり申し訳ございません。かしこ。ステイルインラブ」

手紙の筆跡は末尾の署名に至るまで、一様に整ったものだった。ただ、後ろに行くにつれて僅かに、ほんの僅かにその文字が震えているようにアルヴには思えた。

「ばか、この……太ばか」

アルヴの口から罵りの言葉がこぼれた。涙がひとつづつ便箋に落ち、青黒のインクが滲んだ。

「何が、愛よ。ふざけないで」

アルヴの言葉は止まらなかった。涙が頬を伝うのに任せたまま、言葉がせきを切ったように溢れ出した。

「耳の先から尻尾の先まであなたは間違ってる。愛するってそういうことじゃないでしょう。互いを燃やして、燃やし尽くして滅びるしかなかったあなたたち二人のそれが、そんなものが愛であるわけじゃないでしょう！」

そんなものに頼らなくても、あなたは愛せてたんだよ。あの赤ちゃんを見てよ。あの子は痩せもせず、今まで健康だった。見つけたときの服だって清潔で、目やにも拭われてたって看護師さんも言ってたよ。柔らかな足の裏をして、人を見て笑っ

てくれる子だったよ。愛情のないところで育った子が、母親に見放された子が、そんなふうになるわけじゃないでしょう！一番愛情が深いと思う相手に託そうと思うなら、そこまで案じることが出来るなら……それが愛でなくてなんだったというのよ！」

アルヴは束ねた便箋を両手で握りしめて力任せに引き裂こうとして、震える手を止めた。食いしばった歯の間から漏れ出た荒い息が、暖房の入っていない室内で白く煙った。

「何を一人で早合点して、愛することができないなんて決めて、愛せていた自分の子どもさえ捨てて……なんで全部一人で決めて先に行ってしまうのよ。あなたはいつもそう、いつも自分だけ、先に……」

最後は言葉の体をなしていなかった。アルヴは耳を後ろへ伏せ、罵声とも慟哭ともつかぬ唸りをあげ続けた。時を追うごとに唸り声はやがて涙声へと変わり、すすり泣きから沈黙へと変わっていった。

やがて、アルヴは真つ赤になった目をこすり、オフイスチェアから立ち上がった。その手にはスマートフォンと田村にもらったメモが、しっかりと握られていた。

(了)

初出…『ステイルインラブ合同―花畑―』 葦原屋 二〇二六年